

読書会の大きなパワー

川 涯 利 雄

1 高校生の読書会

読書会は裏切らない。高校の国語教育40年の体験をとおして考えると、読書会ほど青年の覚醒を促す国語教育の「方法」はないと思われる。

要因は幾つかある。テキストに盛られた素晴らしい人生観・叡智の果たす役割は大きい。しかし、その叡智に一人で触れてもそれを生かすだけの素養がまだ育っていない高校生は少なくない。読書会が青年の覚醒を促す要因の最大のものは、「対話」ではないかと私は考える。

教師の解説中心の授業より、教師が教壇を降りて、生徒と同じ位置に座って1つの文学書を囲み、対話する教育効果は大きい。

一人の教師と40余人の高校生が1冊の書物を挟んで対話している風景は、母鳥が外から卵の殻を啄き、内なる雛の啐を促す啐啄^{そったく}同時を思い起こさせる。

若者はすこしばかり高級な対話を喜ぶ。少し背伸びして物を考えることが好きだ。こうして考えたことを自分の拙い言葉で語る。この「語る」中に、高校生たちの「覚醒」は準備されているように思われる。

対話には仲間と一緒にであるという喜びがある。友人の優れた意見を聞いて感動し、友情や敬意を感じる喜びがある。自分の意見が友人たちに称えられる喜びがある。対話には切磋琢磨している喜びがある。

青年の覚醒、成長は仲間同士の対話の中から醸成されることが多い。

加治木の島津義弘公は、夜、家臣の子弟を自宅に呼んで、皆で議論させたという。薩摩の郷中（ごじゅう）教育の始まりであろう。「議を言う」ことをとおして、青少年の覚醒を促したのであったろう。

大事な読書会を幾つも体験したが、その中から2つに絞って報告する。

2 夏目漱石著「こころ」

教科書の『こころ』を読んだ。漱石の文章の裏に、あるいは奥に、文字では語らない何かを発見したら、それを自由に発表するという形で授業を進めた。活発な意見がでて、教室は熱気を帯びていた。

進学校と呼ばれる高校で、普通に取り入れられるいわゆる「トップクラス」ではない。生徒たちが自嘲ぎみに自ら言う、いわゆる「並」クラスであった。教科書の『こころ』が終わったところで、「先生、1冊まるごと『こころ』が読みたい」と皆が言い出した。

私は33歳だった。私自身がまだ底しれない混迷のなかにあった。

A高校は朝・夕の課外のある学校で、教師にも生徒にも余分の時間はなかった。私は決意して授業のなかで、『こころ』全編を読むことにした。

しかし、しばらくすると中間考査が迫ってくる。他のクラスと一緒に中間試験をすることが出来ない。わたしはこのクラスについては中間考査をしないことを決意し、国語科の教師10人に相談した。

同僚はみな驚いた。「それは川涯さん、大変なことだよ」と同僚たちは言った。「まあ、実際にどのような授業をしているのか、まず観させてもらおうじゃないか」ということになり、教頭も交えた11人が私の授業を参観した。

「これならいい」と理解し、全員が納得してくれた。「こういう授業なら中間考査を一度くらい飛ばしてもかまわない」と積極的に支持する声もあがった。読書会形式の授業を生徒たちは喜び、積極的に自己の発見を語った。生徒たちは輝いていた。授業は成功し、私たちは大きな時間をゆったりかけて、漱石の『こころ』を全編読み上げることができた。

やがて、このクラスでは、授業が終わると質問を持って廊下に待つ生徒たちが出始めた。ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』をもってくる生徒に困惑しながら、私も購入して一緒に学んだ。

そのころ、実施された校外模試で、このクラスの国語がぐっと頭をだした。学力というもののメカニズムが分かったと思った。感動が大事なのだ。感動が感性を刺激し磨き、理解力を掘り起こす。この感動をもたらしただけの要因は読書会の対話の力だったと思っている。

3 筋ジス病棟読書会

読書会の効用をより顕著に示したのは、筋ジス病棟の読書会だった。

私が普通高校教育に別れを告げて加治木養護学校に赴任すると、隣接する南九州病院の筋ジス病棟の患者（大人）たちが車椅子で寄ってきて「読書会をしてください」という。

近くの加治木高校の教師をしている頃、この養護学校が主催する短歌教室の講師を拝命したことがあった。その受講生たちであった。

勤務を終えて毎日病棟に立ち寄った。夕食を終えた筋ジスの友人5人の車椅子が小さな図書室に集まってきた。

最初は『小倉百人一首』を読んだ。教材はみな、受講生が決める。丹念に読み、お互いによく勉強した。対話が楽しかった。

彼らは養護学校の卒業生だったが、彼らの理解力は普通高校生の平均的な理解力をしのぐ豊かさを持っているように思われた。対話の中から自然に醸し出される智慧は大きい。

その後、私たちは遠藤周作の『沈黙』、『深い河』を続けて読み、神とは何かを考えた。人間の生きる意味を考えた。人間はどこに向かって生きべきか考えた。遠藤の信仰がいかなるものか見えたように思った。

さらに、吉田兼好の『徒然草』を上巻・中巻まで読み、多くの叡智を頂いた。格調高く、しかも分かりやすい兼好の文章は、多く高校1年生の教材に採られるが、本当は大学生が読んでも読みほぐせないほど、中身の濃い文章である。「文は人なり」という言葉を思わせる格調高い文体に触れて、私たちは人間的になにか大きく成長した感じをもった。

膨大な上巻・中巻を読んで一休みし、大江健三郎の『宙返り』に移った。これが難儀だった。文章は平易だが、意図が読み解けない。こんなつまらない場面をなぜ大江はこれほど丁寧に書く必要があったのか？ 皆で議論した。

人間誰もが愚かな存在なのだというメッセージしか聞えなかった。ノーベル賞作家の作品をわれわれは理解できず、感動できなかった。しかし、このああでもない、こうでもないという話し合いの中から、筋ジス患者の本音が漏れた。車椅子の友人たちは生き生きと本音を語った。大江の文章を読みながら、障害者たちが、本音を語りだしたことは面白いが、やはり対話のもたらす力が大事だった。

彼らは語った。病院に大変お世話になっているし、素晴らしい処遇を頂いている。ここからありがたいと思っていると彼らはまず、社会や病院への感謝から語る。「だが、本当を言うと」と語り始めた。「本当は、病院の外に出て自立した生活がしてみたい」「外の人々と交流がしてみたい」「自分の作った時間割で1日の生活をしてみたい」「自己の行動の主人公は自分である、そんな生活がしたい」と切実な声で言いだした。「自分のパソコンの力を社会に役立てることは出来ないか、試してみたい」「自分で働いて得たお金で生活してみたい」などと語り出した。

私は彼らを励まして一緒に行動することを約束した。まず、彼らの活躍する場となり、外との交流の窓口になるべき会を作った。「福祉から文化を拓く View の会」と命名した。会は濱里忠宜先生のご指導を頂いて完成し、軌道に乗った。機関誌「View 川通信」も好評できちんと黒字経営が続いた。

彼らが病院を出た後の生活を支えるために、私は妻にお願いして「加治木まんじゅう ぶどうの木」を立ち上げた。これも多くの人々の協力があった。歌人馬場あき子先生・伊藤一彦さんに大変お世話になった。南日本新聞の皆様にご支援をいただいた。「千の風になって」がブレイクし始めたころに作家新井満さんも訪ねてきて協力してくれた。テレビ・ラジオの皆様のご支援もあって、加治木まんじゅうは軌道に乗った。MBC の美しいディレクターと住宅地を回りながら、「加治木饅頭はいりませんか？」と呼びかけながら売り歩いたこともある。

そんな頃、不思議な篤志家が現れて「ぶどうの木調剤薬局」を南九州病院の目の前に突貫工事で造ってくださった。その近くにたまたまバリアフリーの大きな家があって、車椅子の娘さん方が薬局を経営すると聞いて、「それでは、私たちがここを出しましょう。どうぞ、あなた方がここにお住みなさい」と言って出てくださった。

寝返りもできない筋ジスの姉妹二人がまず病院を出て社会で生活を始めた。

読書会のメンバーだった筋ジスの姉妹はこうしてバリアフリーの家に住み、昼は薬局の社長・副社長として働き、夜は介護者が傍にいてくれる生活を確保した。お客がひっきりなしに来て、社会の生活の歓びを満喫したのである。今は鹿児島市に出て、NPO を立ち上げ、さらに大き

な成功を収めている。

読書会の対話がもたらした大きな成果だった。

4 対話の力

仲間が心を割って語ることによって生まれる力は偉大である。認識に至らないもやもやした「感じ」が、対話をとおして言葉を得、認識に至るとき、人は「そうか、わかった」と思う。この新しい発見（認識）の感動・喜びは脳の「扁桃体」に感情として蓄積され、その知識・智恵は「海馬」に記憶される。

一般に記憶された知識は20分後には40%が消え、1日経つと70%が消えるというが、「扁桃体」に蓄積された感情とともに「海馬」に記憶された感動的な「認識」や「知識」は消えない。

なぜ、「対話」が必要なのか？ 人間同士のぬくもりある言葉が心の闇に眠る魂を覚醒させ、「善きもの」への旅立ちを促すのだと思われる。人間の覚醒のためには、人間の対話のもつ「ぬくもり」が欠かせないのだと思っている。

「人は人によって人になる」。一人だけの読書も貴重だが、仲間の「読書会」はその数倍の効果を生み出すように思われる。

(華短歌会代表)